群教セ	Ｉ01 － 04
	平22.242集

知的障害特別支援学級における個に応じた授業の改善

── ＩＣＦ関連図を用いた個別の指導計画の作成と活用を通して ──

長期研修員　　片野　裕美

《研究の概要》

本研究は、個々のニーズに合わせた支援を目指して、知的障害特別支援学級の児童に対しての授業実践を通して研究を行うものである。ＩＣＦの考え方を取り入れ、「活動」と「参加」を中心として児童の実態把握を行う。「環境因子」を考慮することで必要な支援を焦点化し効果的な教育支援方法について探っていく。また、ＩＣＦ関連図を授業レベルで考えることで個別の指導計画として用い、一人一人のニーズに応える授業改善の方法を示す。

キーワード　【特別支援教育　知的障害　ICF関連図　個別の指導計画　授業改善】

Ⅰ　主題設定の理由

平成19年度から特別支援教育が全面実施されてから、今年で４年目となる。「特別支援教育の推進について（文部科学省通知 H19.4.1)」のなかで、「特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握しその持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善または克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。」と示された。これを受け、各学校で特別支援教育コーディネーターを中心に障害のある児童生徒の教育的ニーズを把握し、それに応じた指導や支援を校内の教職員あるいは関係機関と連携して行っていく取組がなされ、特別支援教育の推進が図られてきた。しかし、児童生徒の障害が多様化・重度化する中で、十分な教育的支援がなされているとは言えず、まだ課題が多いのが現状である。特に特別支援学級においては、通常の学級から特別な支援が必要なため籍を移したり、保護者の要望から重度の障害があっても特別支援学級に入級したりする児童生徒が増えており、様々な障害種あるいは軽度から重度の児童生徒が混在してきている。このような状況の中で、一人一人の教育的ニーズを的確に把握し、適切な指導・支援を行うことに難しさと不安を抱えている教員は多い。

2008年の中央教育審議会の答申の中で、学習指導要領の中に「ＩＣＦ（国際生活機能分類）の考え方を踏まえ、自立と社会参加を目指した指導の一層の充実を図る観点から、子どもの的確な実態把握、関係機関等との効果的な連携、環境への配慮などを盛り込む。」と示された。また、今回の学習指導要領の改訂において、特別支援学校学習指導要領解説「自立活動編」の中で、ＩＣＦによる障害のとらえ方の転換が記された。ＩＣＦは「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」といった生活機能との関連で「障害」をとらえるとともに、「健康状態」と「個人因子」や「環境因子」との相互の関わりを踏まえ人々の生活全体を考えるものである。

そこで、ＩＣＦの視点に立ち、児童生徒の「学習上又は生活上の困難」を把握し、目標や手だてを導き出せば、個に応じた指導や支援の質が高まるのではないかと考えた。そしてＩＣＦ関連図を用いた個別の指導計画を作成し、授業作りに生かしていけば授業改善に役立つと考える。このような取組を継続することで、多種多様な特別支援学級の児童生徒の教育的ニーズに応えることができ、生き生きと学ぶ姿を引き出せるのではないかと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

知的障害特別支援学級の児童を対象として、ＩＣＦ関連図（図１）を用いて、児童の生活全体を多面的にとらえ具体的な手だてを明確にした個別の指導計画の作成と授業におけるその活用は、個に応じた授業改善を図る上で有効であったかを明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

１　ＩＣＦ関連図を用いた実態把握シートに児童生徒の様子を記入することにより多面的・総合的に児童の実態を把握できるであろう。また、目標・支援シートにより個のニーズに合わせた指導内容や目標の設定、環境調整等による有効な手だてが明らかになるであろう。

２　ＩＣＦ関連図を用いた個別の指導計画を作成し授業実践に生かすことで、児童生徒が主体的に取り組む授業になるであろう。またＰＤＣＡサイクルにより、さらに個別の指導計画を日々の授業に活用し見直すことで授業改善を図れるであろう。

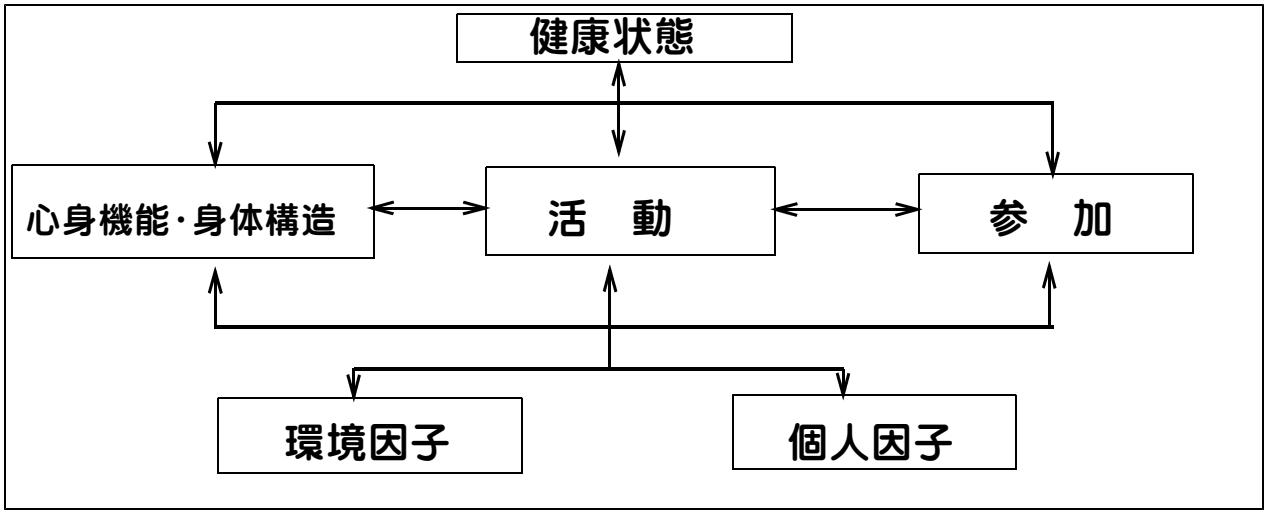


図１　ICF（国際生活機能分類）モデル

＊注　本研究で用いる「ＩＣＦ関連図」とは、国立特別支援教育総合研究所の徳永亜希雄氏が本モデルについて用いた言葉を採用している。（「ＩＣＦ及びＩＣＦーＣＹの活用　試みから実践へ」）

Ⅳ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　ＩＣＦについて

ＩＣＦは、2001年５月にＷＨＯ総会において採択された新たな障害の構造・概念の枠組みである。近年「障害」のとらえ方が、国際障害分類（ＩＣＩＤＨ）から国際生活機能分類（ＩＣＦ）へと変化を遂げた。ＩＣＦは障害を肯定的な見方や社会参加の視点からとらえ、障害の状態を把握するための分類項目の体系であり、障害者支援を総合的に見つめるアプローチとされている。また、社会参加や自立を生涯にわたって支援する上で、関係機関との連携のツールともなるものである。ＩＣＦの考え方を取り入れることにより、その人の障害は決して個人的なものではなく、その人を取り巻く環境や人々の理解と支援によって、重くもなり軽くもなるということになるのである。

ＩＣＦの考え方を教育に活かす利点としては、児童生徒の実態を多角的に把握することができ、目標設定や評価に生かすことができることと、児童生徒の実態を教師のみならず、保護者や関係者、医療関係者等も共通して理解することが容易になることがあげられる。ＩＣＦの活用は、小・中学校に在籍する障害のある児童生徒や特に診断名はないが特別な教育的ニーズがあると思われる児童生徒の理解と支援等においても可能であり、さらに指導の充実や改善、体制の強化に役立つものと考えられる。このため、特別支援教育の推進においては、新しい障害観であるＩＣＦの考え方を活用しながら、児童生徒が抱える困難さについて「活動制限」や「参加制約」を整理・評価して、具体的にどのような周囲の環境を改善すれば良いのか考えることが重要になると考える。なお、成長発達を促すためには、より適切な指導や支援が必要である。このため、教育課程や教師の指導力も

重要な「環境因子」であると考える。

(2)　ＩＣＦ関連図を用いた個別の指導計画の作成と活用

本研究の「個別の指導計画」とは、授業に直接生かすことを目的とし、以下に示す「実態把握シート」（図２）及び「目標・支援シート」（図３）を組み合わせたものである。具体的には、ＩＣＦの構成要素である「健康状態」「心身機能・身体構造」「参加」「活動」「環境因子」「個人因子」を実態把握の枠組み、及び目標・支援を導き出す枠組みとして①～③のように活用する。

① 指導場面における対象児の思いや願いから望ましい参加の状態を想定し、ＩＣＦ関連図を用いた「実態把握シート」に児童生徒の様子を記入し、現状を把握する。

② 「実態把握シート」を基に、実際の授業での目標設定や目標達成につながる環境調整等による手だてを、ＩＣＦ関連図を用いた「目標・支援シート」に記入し、授業に反映させる。

③ 「実態把握シート」及び「目標・支援シート」は、各単元計画時に作成し、蓄積していく。蓄積したシート類を基に、新たな単元を立案・指導するようにする。

(3)　個に応じた授業の改善

本研究では、教育的ニーズを把握するものとしてＩＣＦの考え方を、従来の実態把握に取り入れる。そして、児童生徒の成長・発達を促す手だてを学習環境などの環境要因から考えていく。このことから、教育的ニーズの見直しと授業改善を図っていく。また、生きていく力を育てる視点から児童生徒の持てる力やできる活動を考えることにより、参加へ向けた肯定的な見方をすることができる。漠然とした困難の解決の糸口をそこからつかむことができ、よさを活用し伸ばすことで、より本人主体の活動を導きだしていけると考える。

授業改善を進めるに当たって、ＩＣＦ関連図を用いた個別の指導計画を基にして単元や活動ごとの個別の指導目標、指導内容、指導方法、指導形態、教材教具、配慮事項などを導く。授業後は、「個人因子」の欄を評価として活用し、児童生徒の変容から、目標・支援シートの「環境因子」を見直して再設定を行う等の個別の指導計画を修正する。このように、より効果的な教育活動を充実させるためのＰＤＣＡサイクルに基づいた授業改善を図っていく。

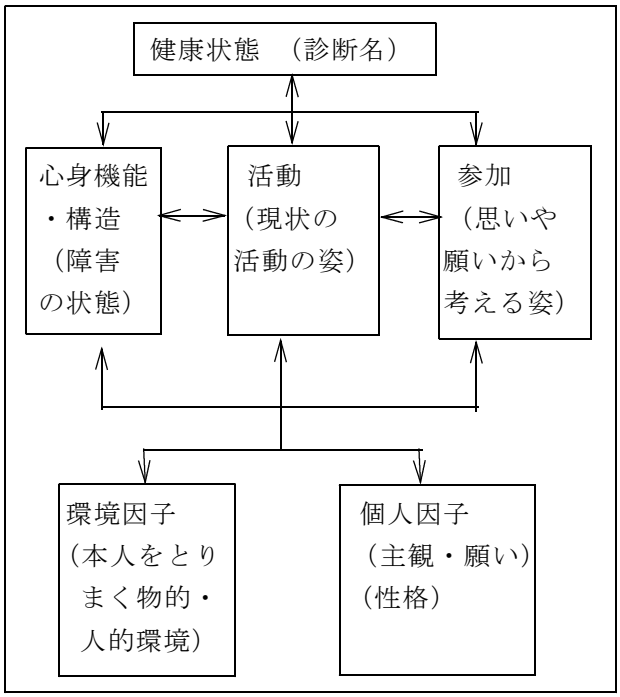


図２　実態把握シート

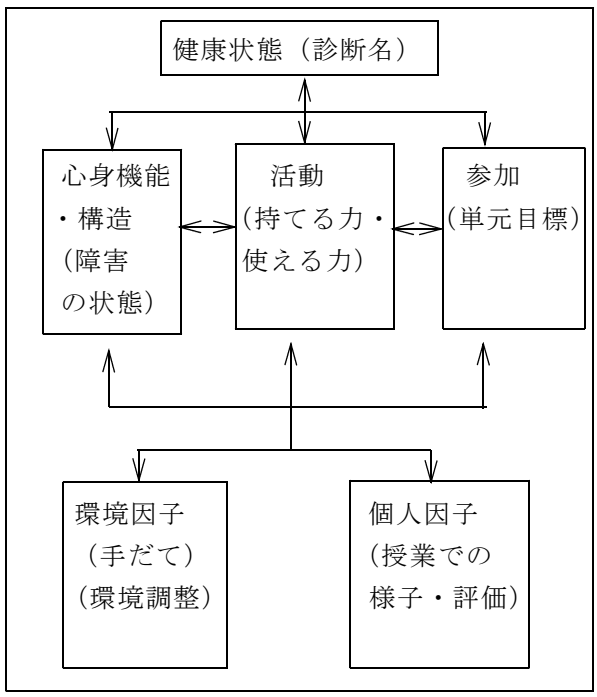


図３　目標･支援シート

＊実態把握シート・目標・支援シートを作成する際には、図２、図３の枠組みで内容を記入する。詳細は、(4)、(5)に示す。

(4)　実態把握シートの内容

（①～⑥は、作成の順番を示す。）

①「健康状態」	診断名（障害名）　療育手帳や身体障害者手帳の判定
②「心身機能・構造」	障害の状態像　認知特性　運動機能　行動特性
③「参加」	本人の思いや願いから指導者が想定する姿 学習やコミュニケーション、運動や動作に関して本人が思い、願っていると考えられる参加の状態を想定し記入する。
④「活動」	現状の活動の様子（「していること」） 今、現在「できていること」「できていないこと」をとらえて記入する。
⑤「環境因子」	本人を取り巻く物的・人的環境　（教室環境、支援体制等）
⑥「個人因子」	氏名、年齢、学年、性別、性格　今の心境・思いや願い、背景にある想い

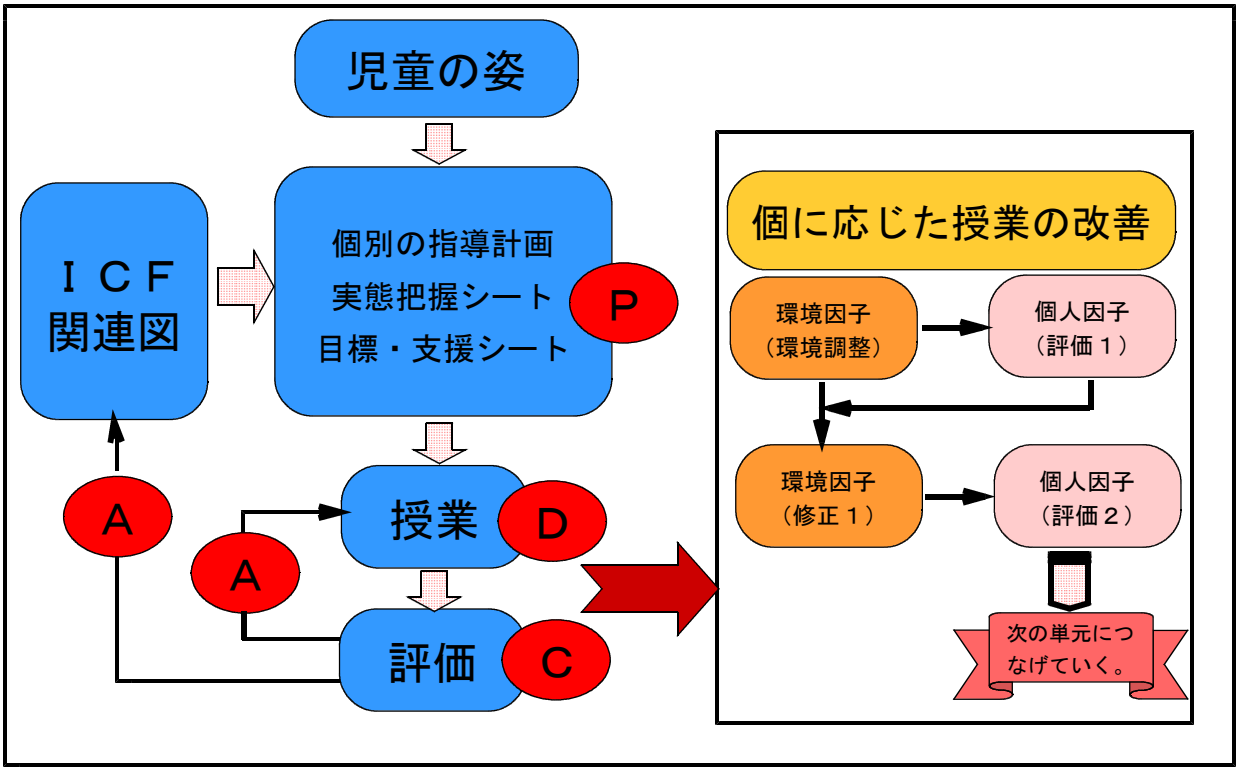
(5)　目標・支援シートの内容

（①～⑥は、作成の順番を示す。）

①「健康状態」	診断名（障害名）　療育手帳や身体障害者手帳の判定
②「心身機能・構造」	障害の状態像　認知特性　運動機能　行動特性
③「参加」	個々の単元目標 対象となる子どもの「参加」の状態がどのようになれば望ましいのかという姿をイメージして単元の目標を具体的に記入する。
④「活動」	持てる力・使える力　できる活動 「参加」の単元目標を達成するために、活動制限や参加制約が何をすることで改善できるか本人の持てる力や使える力を分析した内容を記入する。
⑤「環境因子」	環境調整による具体的な手だて 子どもができる状態になるように、教材や指導方法などの手だてについて、伸びる・伸ばすという面も考えて、誰が、いつ、どこで、 何を、どのように行うかを具体的に記入する。授業場面での手だてについて、「～することで～ができるようにする。」と具体的に記入する。
⑥「個人因子」	授業での気持ち・様子 どんな気持ちで、参加しているか。手だての修正・改善に繋がるような授業での様子について記入する。

＊ＩＣＦモデルの構成要素を基にした(4)実態把握シート・(5)目標・支援シートの各項目の内容は、授業づくりに生かせるよう上記のように位置付けた。

２　研究構想図



Ⅴ　研究の計画と方法

１　授業実施計画

対　　象	研究協力校　知的障害特別支援学級　児童５名（抽出児：Ａ）
単 元 名	生活単元学習「ゲーム大会をしよう」
実践期間	平成22年10月４日～10月15日　　７時間
授 業 者	長期研修員（片野裕美）、他（担任・支援員）

２　学級の実態と抽出児Ａ

本学級は、多様な障害の状況を抱えた５名の児童が在籍している（抽出児Ａ以外の実態は略）。抽出児Ａ（４年生）は、自閉的傾向のある知的障害の児童であり、周囲への注意や関心が散りやすく自分の思いが先立って指示に従って行動できないことがある。学習場面における活動状況について抽出児Ａは、体を動かすことに意欲があり、活動への見通しをもつことによって積極的に参加できる様子がうかがえる。本学習では集団の中で状況に応じてみんなで仲良く取り組める力を育てたいと考え、体を使ったゲームを取り入れた学習を設定した。特に抽出児Ａには、落ち着いて活動に取り組める姿をねらっていきたい。

３　実態把握シートと目標・支援シートの作成

指導観・単元の指導計画を念頭に置きながら、最初にＩＣＦ関連図を用いた実態把握シートを作成する。まず、児童の「健康状態」と「心身機能・身体構造」をとらえる。次に、「参加」・「活動」・「環境因子」・「個人因子」の順に内容を記入していく。さらに、同様の手順で目標・支援シートの内容を作成する。授業後は、「個人因子」の欄に児童の様子を記入し、課題を「環境因子」の欄に結び付け本時の目標や支援方法を修正・具体化し、授業の改善につなげていく。

４　指導計画

主な学習活動	指導上の留意点
１　楽しく遊ぼう。（２時間） ①自由遊び［第１時］児童３名 ・缶を使って自由に遊んだり競ったりする。 ②ルールのある遊び［第２時］児童３名 ・友達と簡単なゲーム（缶積みやボウリング、箱入れ）をして遊ぶ。	・興味・関心を高めることができるように、サンタクロースの袋に「缶」を入れて提示をする。 ・缶での遊びに集中して取り組めるように、外からの情報をカーテンで遮ったり、余分な音をドアを閉めて入れないようにしたり、必要の無い掲示物をはがしたりして環境を整える。 ・遊びを楽しめるように、個々の活動のよさを伝えたり、遊び方を紹介したりする。
２　仲良くゲームをしよう。（２時間） ①ルールのある遊び［第３時］児童５名 ・５人で自由遊びや係決め、競技の練習をする。 ②大会の計画［第４時］児童５名 ・ゲーム大会のめあてを知り、役割の練習や道具制作、ゲームの復習をする。	・活動に見通しをもち、分かって取り組めるように、説明を聞くときの「座るよマット」や位置を示す「スタートマット」、缶を転がす「レーン」や「トンネル」などを用意する。 ・「できた」という実感がもてるよう、持てる力やよさ・強みを生かした教材を制作したり、役割活動を設定したりする。 ・共有してゲームを楽しめるように単純な分かりやすいルールにする。
３　ゲーム大会をしよう（３時間） ①準備と練習［第５時］児童３名 ・看板とプログラムの制作をする。 ・役割の確認をする。 （プログラム係、缶係、ピン係、箱係、得点係、時計係） ・ユニホームと参加切符を受け取る。 ②ゲーム大会［第６・７時］児童５名 ・ゲーム大会の準備をする。 ・ゲーム大会を実施する。 ・片付けを協力して行う。	・期待感や参加意欲を高められように、大会へ向けた「看板」と「プログラム」を制作したり「ゼッケン」や「参加切符」などを用意したりする。 ・それぞれの役割活動を通して持てる力やよさ・個々の強みを集団の中で発揮し、お互いが触れ合って適切なかかわりがもてるよう、見本を示したり、タイミングよく言葉を掛けたりする。 ・みんなで楽しいゲーム大会が開けた満足感と個人のよさや頑張りが集団に伝わるよう、よさを認め合う賞賛の場を設定する。

＊　時間によって学級児童数が異なるのは、協力学級での学習が個々により行われるため。

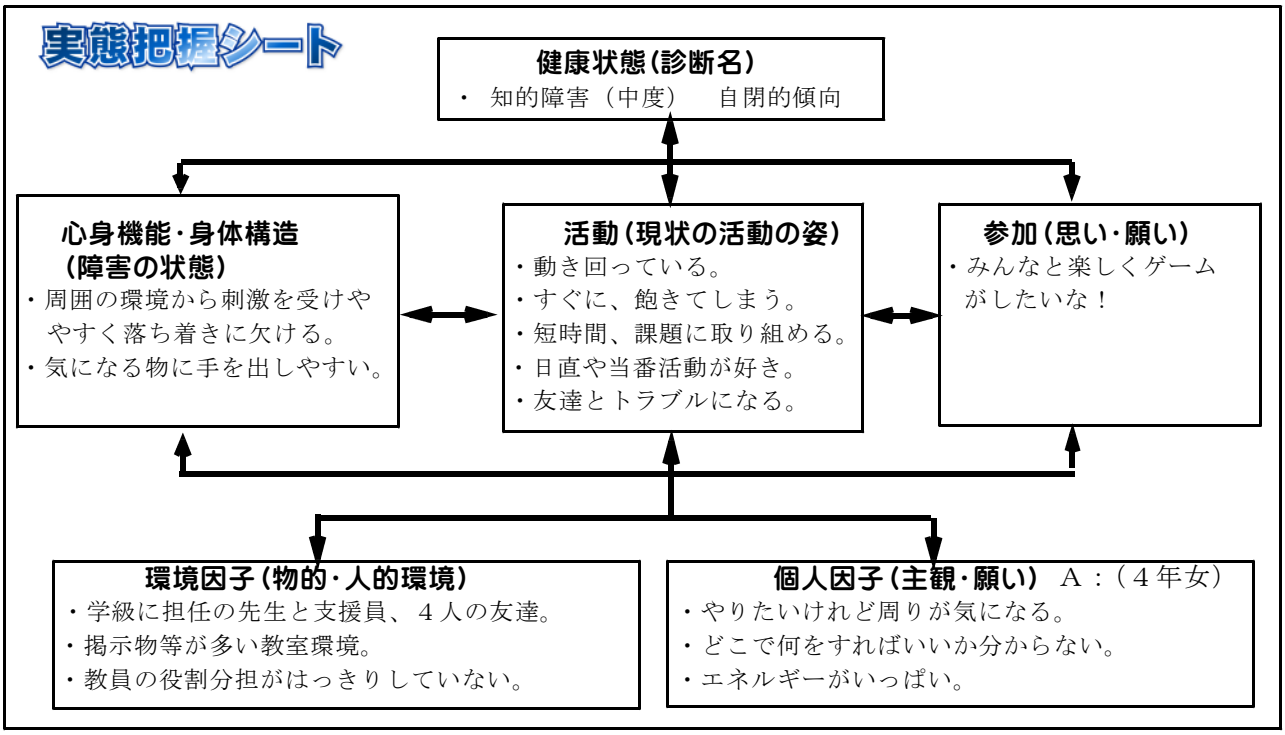
５　検証計画

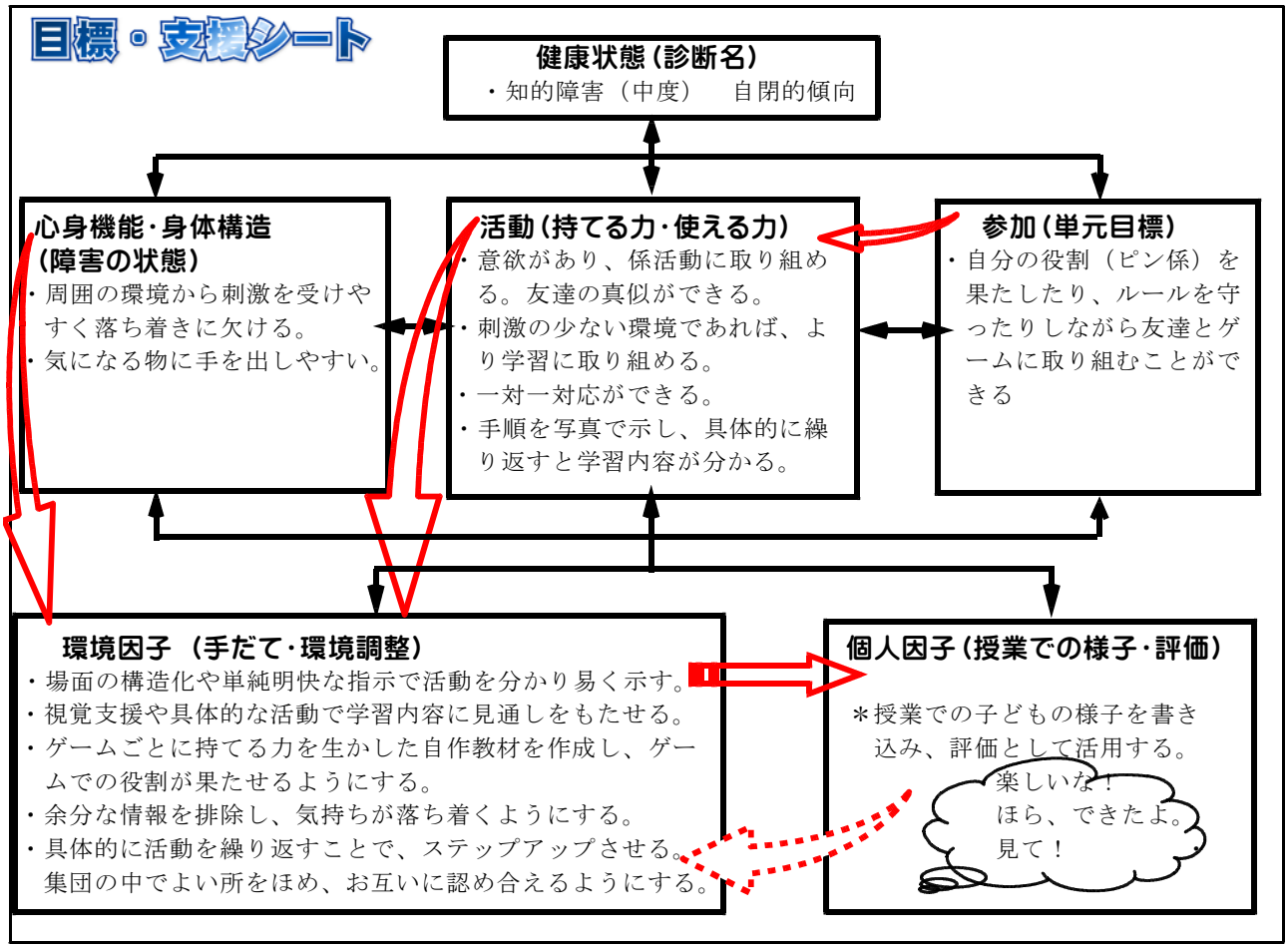
検証の場面（方法）	授業時間（行動観察、表情、発語）
検証の観点	①ＩＣＦ関連図を用いた実態把握シートや目標・支援シートを作成したことは、児童の実態を的確に把握し、適切な目標設定・支援方法を導き出す上で有効であったか。 ②目標・支援シートの「個人因子」により、授業での児童の様子をとらえ、「環境因子」により環境調整等の支援方法を修正し、次時に生かしたことは授業改善を図る上で有効であったか。
検証の処理・解釈	抽出児Ａを中心に行動観察や表情、発語をもとに分析する。 目標・支援シートに示した目標とする参加の姿が見られたか評価する。

Ⅵ　研究の結果と考察

1　実践の概要と結果

（1）「ICF関連図を用いた抽出児Aの個別の指導計画」の作成





(2)　個に応じた授業の改善

①　授業改善の結果　（☆支援　★課題を受けた支援　○よい点　●課題　◎目標との関連）

1　楽しく遊ぼう。（1・2／7時間）

Ａの本時の目標：缶を積んだり転がしたりして集中して遊ぶことができる。

環境因子（支援）

☆落ち着いて取り組むことができるように窓の外に見える物や廊下からの音など気になる情報の排除をして遊びに集中できる環境の設定をする。

☆サンタを模した登場の仕方をして関心を引き、袋の中身（缶）に興味をもたせる。

☆遊びを楽しめるように自由遊びの活動を見守ると共に友達のよさを伝える。

個人因子（評価）

○缶に興味を示して、すぐに遊び出す。気持ちを乱さずに遊べ「もっとやりたい。」と授業の終わりを悲しむ様子が見られた。

◎缶を積んだり転がしたりして、たくさん遊べた。満足した表情の笑顔になる。

●友達のまねをして遊ぼうとするが、うまくできずに飽きて友達の遊んでいる周りをうろうろする。

支援：教材の工夫・役割

2　仲良くゲームをしよう。（3・4／7時間）

Ａの本時の目標：ボウリングゲームの際にピンをピン台に並べることができる。

環境因子（支援）

☆結果が分かりやすい児童の好きな活動の缶積みやボウリングゲームを選定する。

★落ち着いて活動できるよう、強みを生かしたピン係の役割を用意する。

★持てる力に応じたピンとピン台の自作教材を作成し、できる活動を促す。

図4　ピン係用教材

（ピン台は青の画用紙に白い丸印の画用紙を貼り、三角を形作る。ピンは錘を入れて底面に赤いテープを貼り、缶を２個つなげる。）

個人因子（評価）

○ボウリングゲームのピン係に名乗りをあげ自分から、「ピン係をやりたい！」と言う。「ピン係になったんだ」とうれしそうに話す。

◎印にピンを慎重に置いて、６個のピンを並べられる。

○ピンをピン台にセットできたら、友達に「（転がしても）いいよ。どうぞ。」と伝える見本を示すと、まねして言えた。

●相手を意識したやりとりが見られない。頑張りが友達にうまく伝わっていない。

支援：関わり・賞賛

3　ゲーム大会をしよう（6・7／7時間）

Ａの本時の目標：ピンが並べられたら「いいよ。」と自分から友達に伝えることができる。

環境因子（支援）

★友達と適切にかかわれるように役割活動の場面で「いいよ。どうぞ。」「いくよ。」など互いに言葉を掛けるように励ます。

☆看板や飾り、プログラムや取組表を掲示したりチームのゼッケンを着けたりして、ゲーム大会らしい雰囲気を盛り上げる。

★各自のよい所や頑張りが分かるように取組表にまとめて、ゲーム大会の頑張りを発表する。

☆役割設定の活動がうまくできるように支援員と連携して倒れたピンや転がした玉の処理を行う。

個人因子（評価）

○自分からレーンを敷くなどゲームで使う道具の設定に気付いて準備ができた。

◎活動の流れが分かりピンの用意ができた。友達の顔を見て「いいよ。どうぞ」と伝えられた。

○頑張ったことをほめられてみんなの前でメダルや拍手をもらいうれしい表情だった。

○落ち着いてゲーム大会に参加できた。

●缶の数や得点の話になると、よく分からない様子だった。

②　抽出児Aの変容と評価

「缶」を使った自由遊びの場面では直ぐに自分から袋に手を伸ばして缶を次々と取り、遊び始めていった。２段３段と缶を重ねてバランスが悪くなり、崩れると楽しそうに笑い、また新たに取り組みだした。１段目に缶を３個置き、その上に２個の缶を載せ、さらに３段目に１個載せ「できた、見て！」と塔のように積む姿が見られた。授業が進むと遊びの内容が、友達と高さを競う缶積み競争に変わっていった。

図５　興味・関心を引く提示

これは、周囲の気になる情報を制限して落ち着ける環境を設定したことで、安心して遊びに集中して取り組めたものと考えられる。また、題材に興味・関心を高める提示（図５）をしたことで意欲が高まったためと考える。活動が分かり易く児童が取り組み易い内容であったので、見通しをもって自分から活動できていた。

図６　教材の工夫

役割活動では、ピン係に意欲を示し、自分から積極的に名乗りをあげた。ボウリングゲームの間は、飽きずに責任を果たせた。これはできる役割（ピン係）となるよう教材を工夫したことでやることが分かり、主体的な取組につながったと考えられる。

図７　構造化による活動

また、各自が持てる力を生かして役割が果たせるように文字・数や一対一対応の理解を深められるように教材・教具を工夫し作成した（図４・図６）。このことは、一人でもできる状況が生まれ「私もできた」という自己肯定感を育むことができたものと考える。

図８　賞賛と自己肯定感

遊ぶうちに缶の転がし方に変化が見られるようになり、やがて転がした缶を友達が反対側で箱に受け取るという遊びをし出した。真似してやろうとしても箱係は、うまくできないこともあったが怒り出したり投げたりすることは無く過ごせた。そして、これをきっかけにそれぞれが役割を担うというゲーム大会を集団で行えるように変化し、役割を果たしながら「いいよ、どうぞ」と言葉を掛けて友達と関って遊べるようになっていった。また、「始め、終わり」「次は、～です」といった友達の言葉に従い行動したり、きちんと『座るよマット』に座って友達の応援に大きな声を出していた。勝敗にかかわらずに落ち着いて過ごせ、２時間のゲーム大会は場・テーマ・役割の共有が児童の間でできていた。

また、言われなくてもレーンを用意するなどゲームを楽しみに準備や片付けを積極的に頑張るという自主的な活動の見られた場面があった。教室をゲーム大会の会場に準備することや使う道具をゲームごとに分かり易く配置する（図７）ことで参加意欲が高まると共にゲームへの見通しがもてるようになっていったと考える。

児童の活動の様子を見守り、良い面をその場で直ぐにほめて返したり、友達に広げたりした。また、ゲームごとに取組表にシールを貼るなどして評価し、最後の終わりの会でもまとめて賞賛を行った（図８）。このことは、活動への自信につながったと考える。みんなと楽しくゲーム大会をして過ごすことができ満足な表情が見られていたことから、「参加」の目標が達成できたと考える。これらの経験は、将来の主体的に活動する意欲や社会性を身に付けることにつながっていくと考える。

２　実践の考察

(1)　「ＩＣＦ関連図を用いた個別の指導計画」の作成について

ＩＣＦ関連図を用いた実態把握シートと目標・支援シートにより、児童の姿を肯定的に受け止めることができ、「持てる力」の発掘と活用につながった。実践授業を通じ目標とする姿に迫れたことから、実態把握と目標・手だての設定にＩＣＦ関連図を用いた個別の指導計画は、児童の実態から適切な目標の設定や手だてを導く上で有効であったといえる。

(2)　「環境因子」「個人因子」を基にした授業改善について

「環境因子」と「個人因子」を授業の支援と評価に活用したことは、ＰＤＣＡサイクルを生かした授業改善に有効であり児童の変化に対するきめ細かな対応が可能であった。児童は人とのかかわりの中で自分を確かめ自信をつけていく。また、まねをしたり遊びが変化していくにつれ、気持ちも変化していく。このため、予想した姿と異なる変化に臨機応変に対応することができた。

「個人因子」に含まれる主観を大切に考えることで児童が直面している学びにくさ・生きにくさ等の困っていることをつかむことができ、持てる力を生かす教材の製作などの支援によって主体的な取組が見られるようになり、本人の気持ちの満足感と共に集団の中においても有用感を生み出すことができたと考える。

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

本研究は、知的障害特別支援学級において「ＩＣＦ関連図を用いた個別の指導計画」による実態把握・目標設定・環境調整を行い、「環境因子」と「個人因子」を基にした授業改善を実施してきた。以下にその成果を述べる。

○児童の姿を肯定的に受け止めることができ、児童理解がより多面的・総合的になった。

○障害をその人を取り巻く周囲の環境の中でとらえ、「持てる力」の発掘と「使える力」の吟味をすることができ、それらの力の活用につながった。

○ＩＣＦ関連図を用いた個別の指導計画を単元レベルで作成したことで、より授業に直結する計画になり指導案としての役割を兼ね備えることにつながった。

○目標・支援シートの「個人因子」により、児童の変化に対するきめ細かな対応ができた。また、「環境因子」により環境調整等の支援方法を修正し、次時に生かしたことは目標・支援シートに示した単元目標の姿により迫ることができ、授業改善を図ることができた。

○「持てる力」や「使える力」の活用は、児童にのみ大きな負担を強いることなく、児童の直面する学びにくさ・生きにくさが軽減され、満足感や有用感を生み出せた。

２　課題

○実態把握シート・目標支援シートを用いた個別の指導計画は､単元レベルで目標を設定するので、１年あるいは半年といったスパンで考える通常の個別の指導計画とは異なる。単元レベルの計画を引き継ぎ、積み上げていくことで個別の指導計画としての精度を高めていく必要がある。

○実態把握シートと目標・支援シートは、個々のニーズに合わせた個別の学習支援案ともいえると考える。だから、授業全体のねらいと学習集団の様子を踏まえた単元の指導計画があれば、学習指導案としての機能を持たせることができるのではないかと考える。今後、生活単元学習だけでなく自立活動の指導や教科の指導においても実践を継続する中で、改良、検証していきたい。

＜参考文献＞

・上田　敏　著　『ＩＣＦ（国際生活機能分類）の理解と活用』　　きょうされん刊（2005）
・独立行政法人　国立特別支援教育総合研究所　編著　『ＩＣＦ及びＩＣＦ－ＣＹの活用　試みから実践へ－特別支援教育を中心に－』　　ジアース教育新社（2007）
・ＷＨＯ著　厚生労働省大臣官房統計情報部編　『ＩＣＦ－ＣＹ　国際生活機能分類－児童版－』（2009）
・大川　弥生　著　『「よくする介護」を実践するためのＩＣＦの理解と活用』　　中央法規（2009）